



このたびは印刷用『Nの退屈』をダウンロードしていただき、ありがとうございます。
した。PDFファイルを印刷してお読みになる際には、以下の点にご注意下さい。

△注意事項▽

パソコンの画面で読むよりも印刷をしていただく方がもちろん読みやすいのですが、A4の紙にぎつしりと文字が詰まった文書ファイルを大量に印刷すると、インクの消費量も多くなります。小説を全ページ印刷される場合には、ある程度のコストがかかることを予めご了承下さい。

その他、インクの使用量の目安や小説の綴じ方などをホームページの「勝手にQ+A」に掲載しておりますので、是非ご覧下さい。

<http://www.kanmanabe.com/faq.php#p5>

あるとき「トリ」が僕のところへやってきた。僕は2階の自分の部屋で本を読んでいた。その「トリ」は、まあ言えば「鳥」だった。でも何かが違った。だから僕は「トリ」にした。しいて表現するならば、「鳥」という字の4つの点を2つに減らしてみような具合だ。人によっては4つの点が3つ、あるいはまったくなくなってしまうかもしれない。でも他人の「トリ」は僕にとつては何も意味をなさない。僕の脳細胞の中に流れた微細な電流は、「点は2つだ」と言っているのだから。そして僕はそれを受け入れる。受け入れるしかないのだ。

新しい何かを生み出し、それを誰かと共有するのはとても難しい。大抵の場合は、だ。

「退屈力？」とトリは僕に尋ねた。

僕は読んでいた本をぱたと閉じた。

「退屈力？」とトリはまた僕に尋ねた。

「本を読んでいたからね」と僕は答えた。

「退屈ならサンポに連れて行ってくれ」とトリは言った。なぜかとても一方的な話し方だった。

「本は読んでいたけど、退屈だとは言っていない」と僕は弁明した。

するとトリはカクつと左に首を傾げた。何かが理解できなかった様子だ。

「最近この辺も物騒になってね、猟銃を持ったやつがうろろしてやがる。安心してサンポもできなくなった」

「そうかな、そんなに危ないかな」

「危ないさ、とてもじゃないけど」と言ってトリはうなだれた首を左右に何度か振った。

「キミも気をつけた方がいいと思うね」

僕は相槌を打ちながらトリを観察した。トリには鳥らしいところがちゃんとあった。

くちばしと羽があつて、2本の足で窓の外の銀色のサッシの上にカリカリと立っている。

「昨日の昼くらいから随分とカタが凝ってね」とトリは言った。

トリの言い方が少し嘘っぽかったので、僕は「ふうん」と言っただけで流した。

「だから退屈ならカタも揉んで欲しいくらいだ」

「散歩じゃなくて？」

僕がそう尋ねると、トリは少しも考えずに「サンポ優先だ、もちろん」と答えた。

僕はどうやったらトリを散歩することができるか考えてみた。具体的な様子が思い浮かばないが、何となく不自由で残酷なものを想像する。ロープはビニール製のものすごく細い。そしてやたらと長い。

「散歩っていうのはさ」と僕は言った。「いつも自由にしていられないものに、誰かが特別に与えてやる時間なんだ。だから自由気ままに空を飛べるトリにとつてはあんまり必要なことじゃないと思うけど」

「正論だね」とトリは言った。「サンポっていうのは与えるものか？」

「そうだよ」

「じゃあニンゲンはなにカ？ サンポさせられてるのか？」

「いや、それは違うね」と僕は言った。「人間だけは自分で散歩をするんだ」

「そんな風には習わなかったけどな」とトリは不思議そうに言った。少し納得していないようだ。誰に習ったんだ？ と僕は思う。

「人間は自分で散歩をして、空を飛ぶトリには散歩は必要ない」僕は簡単にまとめた。するとトリは、さっきと同じようにカクつと左に首を傾げた。また何かがわからなかったようだ。

「犬は猫をサンポさせるカ？」

「させない」

「ニンゲンは犬をサンポさせるカ？」

「させる」

「ニンゲンは猫をサンポさせるカ？」

「させない」

「猫は自由に空を飛べるカ？」

「飛べない」

最後のひと言で、僕は少し声を大きくした。するとトリは背筋をぴんと伸ばして目をつぶった。トリはしばらくその姿勢のまま何か考えているようだった。瞼の後ろで眼球がごろごろと動いているのがわかる。

「まあいいさ」トリは目を閉じたまま言った。「とにかくありがとよ、付き合ってもらって」

「構わないよ、お礼を言われるほどのことじゃない。今日は何も予定がないし」と僕は言った。

「なあ」とトリが言った。いつの間にか目を開けていた。「退屈なのか？」

「まあね」と僕は答えた。

トリが飛び去ってしまうと、僕はさっき読んでいた本を開いた。ちらっと机の上の時計を見ると、午後の3時を少し回ったところだった。

*

僕の部屋の窓からは、僕の家の小さな裏庭と、家の敷地を囲っているブロック塀と、その向こうの空き地が見える。空き地は僕の家がある一辺以外はぐるりと一方通行の道に囲まれていて、道の脇には当然のように家が並んでいる。家の玄関は全部空き地の方を向いている。ステージ下最前列の観客みただ、と僕はいつも思う。

ここから一番遠い空き地の角には駄菓子屋兼パン屋のような古びた個人商店があつて、ごくまれに人が出入りする。その店は近所では「角のパン屋」と呼ばれている。

空き地にはあまり人が近づかない。なぜならそこは私有地だからだ。だから実質的には空き地ではあるけれど、誰もが自由に出入りすることはできない。ちゃんと看板もある。聞いた話だが、20年ほど前には自動車の整備工場として使われていた土地なのだろうだ。工場が閉鎖したあと、少しずつ建物が取り壊されていき、今では工場の面影はほとんど残っていない。ナンバープレートのない錆びたスクラップ車が1台と、逆さまを向いた大きなドラム缶が2つ、空き地の隅に放置されているだけだ。空き地には柵がないから、公園と間違えて誰かが踏み入れることもある。でも大抵の場合、立て看板に気がついていそいそと立ち去っていく。私有地につき立ち入り禁止。

4時前になって、またトリがやってきた。さっきと同じ場所に立ってこちらを見ている。

「やあ」とトリは言う。僕は黙って本を閉じる。「サンポの意味がわかったんだ。それを伝えに来た」

僕はトリの目を見る。目はちゃんと2つある。飴玉のような丸い目だ。

「偉大なる勘違いっていうのはこのことだ」とトリは言った。

「何をどう勘違いしてたんだ？」聞いて欲しそうにしているトリに僕はちゃんと質問してやる。

「ニンゲンは犬をサンポさせて、猫は自分でサンポして、トリは空を飛ぶからサンポをしないが、ニンゲンは空を飛べないからサンポさせられている」トリは言葉の切れ目ごとに羽をびくっと動かしてリズムを取った。「したがって、人間はとてもタイムンだということになるな」

空き地の横を一台の車が通り過ぎて、角のパン屋のところに右に曲がる。ブウウンという低い音が窓を揺らす。僕は机の真ん中に置いた本を引き出しにしまって、机の上をきれいに片付けた。

トリが返事を待っているようだったので、僕は「そうかもしれないな」と言っておいた。最後のところは全然意味がわからないけど、一応そういうことにしておこう。

「ニンゲンはサンポさせられている——ふむ、偉大なる勘違いから生まれた偉大なるテーマといったところだな」

人間が何に散歩させられているのかを聞き返そうとすると、トリが先に喋り出した。

「そもそも退屈だからゲームをするのか？」とトリが尋ねた。脈絡のない質問だ。

「そもそも僕は本を読んでいたんだ」と僕は反論する。

「ゲームもしてるじゃないか、いつだって。電車に乗るのがそんなに楽しいのか？」

僕にはトリが何を言っているのかがわからなかった。でも一応聞き返してみる。

「電車？」

「そう、電車のゲームだよ。電車を動かすゲームがあるだろう？」

「あるね。あるけど僕はやらない」

「退屈なのにゲームをやるってのはどういうわけ？」

僕はトリが一般的な話をしているのだということに気づき、頭を切り替える。

「それは違う」と僕は言った。「退屈だからゲームをやるんだ。ゲームをやれば退屈が紛れる」

「ほんとカ？」

僕はトリがどこで電車のゲームを見たのかが気になった。

世の中には不思議なゲームがある。そのゲームはプレイヤーが運転手になって、日本中の電車を運転する。線路の曲がり具合や、風景までしっかりと作りこんでいる。他の電車とすれ違うこともある。JRの時刻表を毎月買うようなタイプの人間がやるのはわかるが、何がどういう風に面白いのかは僕にはわからない。もちろん僕はそのゲームをやったことがない。

「電車について考えて、痛んだ」とトリは言った。「間違えた。考、え、て、い、た、ん、だ、」

わかるよ、という風に僕は頷いた。

「退屈なのにゲームなんてやってると、ますます退屈になる。違うカ？」

「どうかな」と僕は答えた。実際のところ、よくわからなかった。退屈とゲームの関わりについてなんて考えたこともなかった。

「タイマンだから退屈するんだ」とトリが言った。

そうかもしれない、と僕は思った。

『退屈な電車』っていう言葉がある。知ってるカ？」

「知らない」

トリは首をピツピツと左右に瞬間的に振ってみせた。何かをためらっている様子だと直感的にわかった。

「退屈について話してもいいカ？」とトリは言った。どうぞ、と僕は答えた。

「退屈っていうのはね、いいカイ？ 人生を後ろから追いかけてくる電車みたいなものだ。電車はただ単に追いかけてくるだけじゃなくて、あるルールで動いてる。電車はキミが前を向いて歩いているときにはゆっくりとあとをついてくるけど、キミがちよつと後ろを向いて電車のことを気にしたりすると、急に顔色を変えて猛烈なスピードで追いかけてくる。そういうルールだ。昔そんなゲームがあったような気がしないカ？」

さあ、あったかもしれないな、と僕は言った。トリの口調がさっきより速くなった。息継ぎをほとんどしていないように見える。

「そうするとキミは轢かれたくないから全速力で前を向いて走り始める。しばらく一心不乱に逃げているうちに、キミはどうしてそんなに早く走っているのかを忘れてしまう。」

あるいはあきらめてしまう。轢かれてもいいや、ってね。でも実際には電車はキミのちよつと後ろで失速する。キミを押しつぶしてしまわないように。だから結果的にはキミは走っても走らなくても良かったんだ。でもキミは必ず走ってしまふ。あとになつて走のをやめるとしても、まずは走り始める。なぜならキミは、電車がキミを轢いたりなんかしないってことを知らないからだ。ナ？」

「わかるよ、言つてゐることは。つまり、僕は逃げ続けるしかないってことだろう？ その電車から」僕は努めてゆつくりと受け答えをした。

「その通りだよ」とトリは満足げに言つた。「じゃあもしキミが最初に振り返つて電車を見たときに、その場に立ち止まつて電車が猛烈なスピードで近づいてくるのをじつと見つめたでしょう。何が起る力？」

僕が質問されたことに気づいて頭を働かそうとする前に、トリは勝手に話を続けた。

「そうだよ、電車が失速するんだ。正解。あれ、さっき言つた力？ でも電車は完全に止まることはない。そうすると次は何が起る力？ そう、時間が伸びるんだ。時間が伸びて、キミはとてもゆつくり時間が経つように感じる。実際、時間は伸びている。つまり、電車と向き合つてゐると、キミはとても退屈になる。もしかしたら電車は自分を押しつぶしたりなんてしないんじゃないかって思いながら、そのあまりにも鈍重な時間の長さにうんざりするんだ。そしてキミはさらに深く退屈する。キミに残された道はただひとつ、前を向いてまた歩き始めることなんだ」

「それはその——相対性理論とか、そういう話？」

「ナニ、そんな難しい話をしてるわけじゃない。退屈と電車の話をしているだけさ」とトリは言つた。「もしピンとこなければ、『電車』を『退屈』に読み替えてみればいい。そうすればもっとよくわかる」

僕はしばらく考えてから、「なるほど」と呟いた。それにしてもよく喋る。

「だから、だ」

「——何？」

「キミは退屈している。揺るぎない結論として」

僕は腕を組んだ。そうかもしれない。

「不満力？ でもそもそもキミは無職だ」

僕は何も答えなかった。文脈はおかしかったけれど、トリの言っていることは正しかった。

「無職もタイマンのうちだ。違う力？」

「そうだと思うよ」

『セイサンセイダイイチシユギノカンリシヤカイ』っていう言葉があるよな」

「よくわからない」と僕は言つた。

「牧羊犬と老いた羊みたいなんさ。牧羊犬の狙いは、羊が後ろを振り返らないように

しながら前を向いてゆつくりと歩かせることだ。振り返られると羊が怖がる。あんまり速く歩かせると年老いた羊は死んでしまう。ひと昔前までは、その巧妙なプログラムにキミたちはみんなすつかり取り込まれていた。誰も疑わなかったんだ、総体としてはね。みんなが揃って前を向いてゆつくりと歩いていたんだ。そして一番問題だったのは、羊自身が何に追い立てられているかをちゃんとわかってたってことだ。むしろ羊はそれを好んでさえいた。』とにかく前を向いて歩いてさえいればいい。何も考えなくてもいいんだ』っていう風にそのプログラムを従順に受け入れていたんだ。バカでタイマンな羊だ。救いようがない。でも今はちよつと事情が違ってる。キミみたいに、牧羊犬を恐れない羊が現れ始めたんだ。後ろを向いて、電車が近づいてくるのをいつまでも眺めていたいと思うようなニンゲンが増えたんだ」

「例えが多くてわかりにくいな」僕は感想を述べた。少し頭の中が混乱してきた。

「そうか？ 電車と退屈とニンゲンと牧羊犬と老いた羊を登場させただけだ。ン？ なんで奇数なんだ？ 5？ 奇数？ ン——」

ボロボロボロと人を馬鹿にしたみたいな音を立てながらスクーターが1台公園の横を通り過ぎて行った。トリには何も聞こえていないみたいだった。何かが心に引っかかったらしく、トリはあらゆる動作を一時停止している。

スクーターの音が止んだところで、僕は「まあいいじゃないか」と心の中で呟いた。するとそれを合図にしたみたいにトリはまた動き出した。

「まあそれはいいでしょう。要するに、プログラムがうまく機能しなくなったんだ。『セイサンセイダイイチシュギノカンリシヤカイ』ってのは言い換えれば『退屈させないシステム』のことだ。退屈させずにうまく歩かせ続けたいんだよ、あいつらは。でもいつからか『セイサンセイダイイチシュギノカンリシヤカイ』が思うように構築できなくなった。まだまだ局地的であるけれど、それは次第に広がっている。プログラムにバグが見つかり始めたんだ。タイマンにつけ込んだ手口は賞賛に値するが、タイマンの行く先を見誤ったんだな。そしてキミはその一端を担っている。だから今からNと呼ばせてくれ、キミのことを」

「それもよくわからないな」と僕は言った。

「ナイキのNだよ」と言ってトリはにやりと笑った。

嘘に決まっているじゃないか、と僕は思った。

*

『N』が何を指すかはこの際置いておいて、その日から僕はトリに『N』と呼ばれるようになった。トリは前触れもなく（僕が見分けられなかっただけかもしれないけれど）うちにやってきては、窓のサッシのところでひとしきり喋っては飛び去った。

「やあ、N、知ってるか？ 聞いた話なんだが――」

そんな具合だ。大抵の場合、トリの話の中には「退屈」というキーワードが含まれていた。トリは「退屈」という言葉について毎日真剣に考えているようだった。

ある日のことだ。角のパン屋の目の前で交通事故があった。事故の瞬間は見なかったけれど、救急車のサイレンが聞こえてからしばらくして2階に上がったとき、ブロック塀に車体をめりこませた軽自動車が部屋からよく見えた。その後すぐに警察の車が何台か来て、2時間ばかり現場検証や事故車の処理をやっていた。たぶん手際がよかったのだろう、その日のうちに角のパン屋の前はいつもと同じ静けさを取り戻した。部分的に壊れたブロック塀の前には小さな花束が2つ置かれていた。誰かが亡くなったのだ。

夕方になってトリがやってきた。

「チエさんと庄吉つつあんが亡くなった」トリは開口一番そう言った。

「へえ」と僕は言った。

「Nも見ただろう？ ここからならよく見える」

僕はトリがああ事故のことを言っているのだと気がついた。

「車は危ないんだ」と僕は言った。

「チエさんと庄吉つつあん、いい人だったんだ」

「どうして知ってるんだ？」と僕は聞いてみた。

「近所だからね」とトリは言った。「関心ないのか？ そういうことに」

「関心？ 何について？」

「チエさんと庄吉つつあん」

「知らない人だからね」

「4丁目の豆腐屋の向かいの家だぜ、近所じゃないか」

「近所でも知らない人はたくさんいるさ。僕は空を飛べるわけじゃないから」と僕は説明した。説明になっていないとは思ったが、トリはこういう細かいことをあまり気にしないようだった。

「まあ2人一緒ってのがせてもの救いだな、そう思うだろう？」

「同感だよ」

窓の外が少しだけ暗くなった。雲が出てきたみたいだ。

「これでパンの耳がまた誰かのところにいくな」とトリが呟いた。僕はわからない、という風に首を傾げた。

「パン屋のパンの耳だよ。1日1名様限定。早い者勝ちのゴジュウエン。知ってるだろう？」

「知らない」

「Nはパン屋に行ったことがないのか？」

「どのパン屋？」

「あのパン屋だよ」

トリは角のパン屋のことを言っているようだった。もちろん僕はあのパン屋に行ったことがあるが、それがどのくらい前なのかははっきりと思い出せなかった。随分前の話だ。

「関心ないのか？　そういうことに」とトリはまた僕に聞いた。

「パンの耳について？」

「その周辺について全部」

「あまりあるとは言えないな」僕は正直に言った。

「じゃあこれからしばらくパン屋を観察するといい。次にパンの耳を勝ち取るのはたぶんバス停前のイツジさんだ」

「勝ち取る？　早い者勝ちなんだろう、パンの耳は」

「コウショウではね。でも実際には違う。パンの耳はビンボーな順番にありつける」

「ビンボーな順番？」

「だってそうすりや平等だろう？　パンの耳がわんさか入ってゴジュウエンなんだぜ。お金のない人がもらうのが筋ってもんだ。早い者勝ちなんてのは表面上言ってるだけってことさ」

「知らなかったな、そんな仕組みがあるなんて」

「無関心め」

「以後改めるよ」と僕は言った。

*

その次の日から、2階にいるときにはなるべく窓の前に座って角のパン屋を視界に入れておくようにした。悲しいかな、僕にはそれができる。トリの言うように僕はいま無職で、親元で暮らしている。無償で部屋を与えられ、無償で食事がありつき、好きなだけ本を読んで、寝て、ごく稀に電車の出てこないゲームもする。資格の勉強なんかをしているわけでもないから時間はいくらでもある。ときどき鬱になるけれど、本に没頭しているうちに大抵は直る。1週間かかることもあるけれど、それは面白い本に出会わないときだ。何よりもそのことを僕はあまり深刻には考えないようにしている。あまり深刻に考えないのが一番の薬だと医者にも友人にも親にも親戚のおばさんにも言われた。

3日目の昼前になって僕はそれらしき人物を見つけた。年齢がおおよそでもわからないほど老いた老人だ。おそらく彼がトリの言うイツジさんだ。

イツジさんは左の方角からやってきて、空き地を斜めに横切ってパン屋に入った。ガラガラとドアの開く音が響いてから1分くらいでイツジさんはパン屋から出てきた。右手にはモゴモゴと膨らんだビニール袋を提げている。50円のパンの耳だ。イツジさんはそれをぶらぶらと揺らしながら、大して嬉しそうでもなく、もと来た道を帰っていく。下を向いて歩くせいで顔はよく見えなかった。頭は禿げてはいないが、ほとんどが白髪で手入れをしているようにはとても見えない。細い腰は随分と曲がっている。杖を持っていないのが不思議なくらいだった。

イツジさんはそれから毎日同じような時間帯に現れた。空き地をゆっくりと横切り、帰り道にはビニール袋をぶらぶらと揺らしながら、同じペースで同じところを歩いた。ときどき鼻歌も歌った。そしてイツジさんが鼻歌を歌った日の夕方には、決まってトリが僕のところへやってきた。

「やあ、無職N」

トリは辛辣なことを言うようになった。

「何だよ」と僕はぶつきらぼうに言う。反論はできないからそれくらいしか言い返す言葉がないのだ。

「イツジさん、幸せそうだろうウ？」

「そうかな、わからないけど」

「前は鼻歌なんて歌わなかったんだぜ、家の中でも外でも。それが見てみるよ、今じゃ空き地で鼻歌ときたもんだ」

「いいんじゃないのか？」と僕は適当に流した。トリと真面目に話を始めると長くなるから嫌だ。

「でもまあ外で鼻歌くらい歌ってもバチは当たんねえよな。家であんだだけ苦労してんだから。それにしてもあの嫁はひどいな、イツジさんがかわいそうだ」

僕は黙って本のページをめくった。

「なあ、知ってるカ？ イツジさん、家じゃ息子の嫁に気を遣って、冷蔵庫も自由に開けらんないんだぜ。そりゃあ稼ぎがなくて食わしてもらってる身分だからしようがないっちゃしようがないけどよ。それにしても家族は冷たいよな。あんないいじいさんなのに」

僕はまた黙って本のページをめくった。

「風呂もまともに入れないって話だぜ。夜は嫁と子供がいつ入るかわかんねえから、イツジさんは朝4時に起きて風呂に入って、またひと眠りするんだってよ。気を遣ってるんだ。一人で風呂に入れるだけましだろうって声もあるけどな、それにしてもひどい話じゃねえか。これから寒くなるってのに」

トリはいっぴくなく声を荒げてまくし立てる。僕は何か返事をしてみようと思い、しお

りをはさんで本を閉じた。

「トリはどこでそういう話を仕入れるんだ？」

「なんだ、興味あるのか？」

「多少ね」と僕は答えた。

「基本は自分の目で見て、自分の耳で聞くってことだな。まあ電線にとまったりや大抵のことはわかる」

「そんなものかな」

「そんなもんさ」とトリはそっけなく言った。「オレたちが毎日何をしてるか知ってるか？」

僕は首を横に振る。

「主に4つだ。食う、寝る、飛ぶ。そして勉強。はじめの3つ以外の時間には、オレたちはモウレツに勉強してる」

「勉強？」

「そう。オレたちの中にもタイマンなやつはいるが、大抵はみんな勉強熱心だ。そういったいろいろと教えてくれる。幸い話をする場所には事欠かないからな、これだけ電線がありやね。もちろんこつちが教えてやることだってある。でも主な情報源はニンゲンだ。オレたちは本が読めないから、ニンゲンに教えてもらうことが多いよ」

「ふうん」

「ひとついいことを教えよう」とトリは言った。「ニンゲンが自分の世界に退屈するのは、その世界にはすでに意味を持ち合わせているものしかないからなんだ」

僕は机の上に肘をつけてトリの言うことを聞くことにした。

「ニンゲンが自分の世界において意味をなさないものを求め続けない限り、ニンゲンは退屈する。でも考えてみてくれ。この世の中に意味のないものなんてあるか？ 誰かが言ったように、この世界はすでに形相で満たされている。意味を持ってしまってるんだ。だからニンゲンはいつか世界全体に退屈するという致命的な運命を背負っている。さて、そこでニンゲンはこう考えるだろう。『そもそも世界全体を知り尽くすことなんてできるのか？』ってね。そう、そんなことできつこないのはみんなわかっている。だからニンゲンは退屈しないと考えることもできる。でも不幸にしてニンゲンは考えてしまうんだ。自分はどうすでに世界を知り尽くしているのかもしれないってね。そして退屈するのさ。ゴウマンの一言に尽きる。でも往々にして事態はもっと悪い。大多数は、もうこれ以上知りたくないって思っているのさ。タイマンな無関心。そしてみんな退屈するんだ。全世界的にね」

僕はトリが言ったことについて考えてみた。僕の世界というものについて、その中にある意味のあるものとなないものについて、傲慢と怠慢と無関心について。

「質問」とトリが言った。「Nはこの世界の何パーセントをすでに知っていると認めてる」

カ？」

唐突な質問だ。僕は少し間を置いて言った。

「さあ、1パーセントくらいかな、いやもっと少ないと思う」

「ふむ、じゃあ自分の世界の中の何パーセントをすでに知っていると思ってる？」

僕は腕を組んで考えた。自分の世界の中？ それは僕が行ったことや見たことのある場所、僕の生活の中の、という意味だろうか。

「どうかな、50パーセントくらいはわかってるんじゃないかな」

「ゴ、50パーセント？」トリが目を丸くして驚いている。たぶんもっと小さい数字を期待していたのだろう。

「Nよ、もっと謙虚になれ。まあいい——まあいいとしよう」トリは動揺しているようだった。そんなにとんでもないことを言ったつもりはないのだけれど。

「そうすると——だな、Nはまだ自分の世界の半分をわかっていないということになるな。つまりNにとって意味をなしていないんだ、半分のものが」

僕は首を縦に振った。

「Nはパン屋のパンの耳のことを知らなかった。イツジさんがビンボーしてるのも知らなかった。チェさんと庄吉つつあんのことも知らなかった。全部この窓から見える世界だ。そうだろう？」

僕はもう一度首を縦に振った。

「それだけわかれば今日のところは大丈夫だ」とトリは言った。「そして未来は明るい。謙虚になれよ、タイマン無職N」

夕日が落ちて世界が闇に変わろうとしている。空き地の看板の影が斜めに歪んで地面に黒く映っている。ブロック塀の花がいつの間になくなっていた。

「さて、今宵はそろそろお開きにしよう」

そう言ってトリはパタパタと不器用そうに羽を動かして、真っ直ぐに西の空へ消えた。

その日の夜、インターネットの通販で電車のゲームを買った。翌々日の午後には丁寧に梱包されたゲームソフトがひとつ、宅急便で自宅に届けられた。ろくに説明書も読まないままゲームをやってみたけれど、予想通りとても退屈なゲームだった。何が退屈かというと、何が退屈なのかがよくわからないままにゲームが始まり、終わってしまうことだ。「退屈を感じさせないくらい退屈だ」という表現もできるかもしれない。トリの話に当てはめてみれば、「対象が自分の世界においてすでに意味を持ち合わせているものかどうかを判断するという行為自体が、すでに完璧な意味を持ってしまう」ような状態のことだ。

よくわからないな、と僕は黒い窓に向かって呟いた。

＊

トリが言った。

「憂鬱と退屈の違いについて考えてみたことはあるか？」

わからない、と僕は答えた。最近では、わからない、と答える方が圧倒的に多い。

「憂鬱は美の源となりうるが、退屈は美を生み出さない。耽美主義者にとって憂鬱は良しとされた歴史がそれを証明している。だからNが鬱であるのはある意味でまだ救いようがある」

「僕が鬱？」

「だろウ？」

「どうして知ってる？」

「何度も言った。オレは電線にとまって見てるんだよ。Nが病院に通っているのも知ってるし、まだ完治していないのも知ってる。クスリだって飲んでるだろウ？」

僕は黙って頷いた。

「なあ、患者N。『救いようがある』っていう言葉はとても素敵だと思わないか？」

「どうして？」

「退屈な未来に希望が持てるっていう意味だぜ。未来はもっと退屈なんだ。明るい材料がないとやっていけない」

トリは首を後ろに曲げてチョツチョツと毛づくろいをした。

「一人紹介したい人がいるんだ。聞いてくれるか？」

僕は興味がないふりをしたが、トリはいつものように勝手に話を続けた。

トリが僕に紹介したのは、空き地の向こうの空に頭ひとつ突き出た7階建てのマンションの住人だった。最上階の一番左端に住んでいる若い女の子だ。もちろんトリが写真を運んでくるわけでもなし、電話番号を教えてくれるわけではないから、トリが話したことを全部信じるしかない。もしかしたらトリには写真をもらったり電話番号を聞いたりすることができたのかもしれないけれど、それはトリの関心事ではなかったようだ。あるいは意地が悪かったか。

「マキちゃんっていうんだ」とトリは言った。「いつもオレに米粒をくれる。ジュツキロヒャクエンの精米機でちゃんと精米した米粒さ。そりやうまいのなんのって」

僕は新しく買ってきた文庫本を3冊机の上に積み上げて、それを神経質そうに揃えるふりをしながらトリの話を聞いた。

「マキちゃんのところにはじめて行ったのは、チェさんと庄吉つつあんの事故の少し後だ。パンの耳が誰の手に渡るかを見届けようと毎日張り込んだときに、マキちゃんを見かけたんだ。それで後をつけた」

トリの尾行。トリの散歩よりはしつくりくる言葉だ。

「エレベーターが最上階まで一直線に上がって、マキちゃんが降りた。ああいう高いところには電線がないから、仕方なくベランダの手すりにとまったんだ。あからさまでどうも気に入らないやり方なんだが仕方なかった。そういうこともあるさ。まあコソコソやるやつよりもましだろウ？　パラボラアンテナの陰に隠れるなんてのは愚の骨頂だと思わないカ？」

僕はどう意見を言ったらいいのかわからず、肩をすくめてやり過ごした。トリの世界にも色々あるらしい。

「マキちゃんはカーテンを開けたときにオレを見つけた。それからにつこり笑って部屋に戻って、しばらくしてベランダに出てきたときには手にパンの耳を持ってたんだ。オレはパンの耳も食うけど、イツジさんのものだと思うと食えなかった。だから首を振って米粒をねだったんだ。マキちゃんはすぐ持ってきてくれたよ、米粒を」

「パンの耳って言っても、全部が全部イツジさんのものじゃないだろ？」

「何を言ってる。あのパン屋のパンの耳は、全部一番ビンボーなイツジさんのものだ」

「その子は角のパン屋のパンの耳を持ってたのかい？」

「そうさ。マキちゃんはあそこで最近バイトを始めたんだ」

——なんだ、そういう話か。

「だからオレはマキちゃんに言ったんだ。パンの耳は全部イツジさんにやってくれって」

「マキちゃんはパンの耳を食べるつもりだったのかな？」

「さあね、それは知らないな。パンの耳で立派なお菓子で作れるってこないだ誰かが教えてくれたし、使い道はあるんだろう色々。でもマキちゃんは次の日からパンの耳を持って帰らなくなった。イツジさんの取り分が増えたってわけだ。それからオレは毎日あそこで米粒をもらってる。贅沢な話だ」

僕はトリとマキちゃんが7階のベランダで話をしているところを想像した。トリはきつと紳士的な態度でいるのだろう。適当なおべっかを使いながら、「やお嬢さん」なんて言いながら。たぶんマキちゃんには「トリさん」と呼ばれているに違いない。そしてトリは自分のことを「トリさん」と呼ぶのだ。「トリさんは今日ネエ——」なんて言いながら。

「Nは妬いてるの力？」

「バカを言うな」

「マキちゃんは偉い。ちゃんとバイトをしてるんだ。無職Nと比べるべくもない。ゲームなんてやらないし、自分で料理もするんだぜ」

母親に言われているような気がして、僕は腹が立ってきた。むすつとしてみると、トリは半分口ばしを開けたままコキコキと首を回し始めた。その仕草を見ているうちに、僕はますます腹が立ってきた。

「紹介してやろうか？」

「要らないね」

「遠慮するな」

「してない」

「——まあいい。どうせ毎日パン屋で働いてるんだ。嫌でも見ることになるさ。すつげえかわいいんだぜ、マキちゃん」

それを捨て台詞のように言い残して、トリはマンションの方角へ向けて飛び立った。

僕は角のパン屋を見た。相変わらず人の出入りはほとんどない。その日は夕方から店が閉まるまでずっと窓からパン屋を眺めていたが、それらしき人物は出てこなかった。

朝起きるのが遅いせいで、僕はパン屋が開店する瞬間というのを見たことがない。パン屋とは言ってもちゃんとしたパン屋ではないから、朝5時から開いているわけではないだろう。僕は迷った末に朝8時に目覚まし時計をセットして眠りについた。

翌日アラームの音で目が覚めたとき、パン屋のシャツターはすでに開いていた。

*

マキちゃんを紹介したいと言ったわりには、トリはあまり積極的にマキちゃんの話をしなかった。こちらから尋ねても、適当な言葉であしらわれるばかりだった。

パン屋の開店時間が7時だとわかった日の翌朝、僕は閉じたシャツターの前で手を組んで待っているマキちゃんを見かけた。窓から見ていたのだから見かけたとは言わないかもしれない。

遠目に見るマキちゃんはとても小さかった。たぶん20代前半だと思う。僕と同じくらいの年齢だろう。マキちゃんはストレートのジーンズをはいていて、肩に紐の短いバッグをかけてシャツターの前でじっと立っていた。7時前にガラガラとシャツターが開いて、中から猫背のおばさんが現れてマキちゃんを招き入れた。マキちゃんは頭を下げて挨拶をしたけれど、声までは聞こえなかった

その日から僕は毎日マキちゃんの姿を探すようになった。朝の時間はいつも同じだったから、僕は毎朝6時45分起きてパン屋を寝ぼけまなこで眺めた。マキちゃんが現れると、自然と頭が冴えた。いままでにあまり経験したことのない新鮮な感触だった。

マキちゃんは仕事が終わるまでは店から出てこなかった。店の中で昼ご飯をもらって食べているのだろう。仕事が終わるのはたいてい昼の3時前後で、遅いときでも閉店時間の6時を過ぎることはなかった。

「今日は、とある本をNに薦めたい」とトリは言った。今度は本かよ、と僕は思った。「たぶん世界中で一番退屈な本だ。ウォーホルの『日記』。読んだことないだろう？」この本屋にでもあるわけじゃないが、N得意のツーハンで買えばいい。出版社が山ほど在庫を抱えて困ってる本だ。とてつもなく退屈だが、ひとつだけいいことがある。この本を読めば、アメリカのタクシー代の相場がわかるようになるぜ」

「読んでみるよ」僕は面倒くさくてそのときは適当な返事をしたけれど、トリが帰り際に「マキちゃんも持ってるんだからちゃんと読めよN」と言ったのが気になって、結局その本を読むはめになる。

読むはめになる、とは言ったものの、実はその本（正確なタイトルは『ウォーホル日記』）を手に入れるのはちよっと苦労した。単行本は1万4000円以上するので買えるはずもなく、文庫版を探したのだがどの通販サイトでも在庫がないところばかりだった。しかも文庫版でさえ上下巻で3000円近くするし、ページ数が何と1300ページを超える。結局、僕は市内の美術館に併設された図書館で単行本を見つけ、そこに1週間通い詰めて読むことにした。貸し出しをしていなかったのだ。

『ウォーホル日記』を読み終わるまで、トリは姿を見せなかった。僕がちゃんと本を読んでいるかどうか、どこかで見張っていたのだろう。だから、というわけではないけれど、僕はその電話帳よりも分厚い他人の日記を隅から隅まで手を抜かずに読んだ。

日記は1976年11月24日水曜日のバンクーバーから始まって、1989年2月17日火曜日のニューヨークで終わる。ウォーホルはその間、毎日タイピストにその日自分の身の回りに起こったことを記録させ、その中から編者が選りすぐった部分をまとめて本にした。何のことはない、たったそれだけの本だ。特筆することがあるとすれば、やたらと人名と地名が出てくるせいでカタカナが多いこと（実に3分の1近くがカタカナだ）、人名に注釈がなかったせいで、山ほど登場する人物が誰なのかさっぱりわからないことだ。注釈については、もしそんなものがあつたとすれば巻末にあと100ページは追加しないといけないだろうから、編者が無駄だと思ったか、あきらめたのかもしれない。もしペットに横文字の名前をつけるときに困ったら、この本を開けば少しは役に立つかもしれない。そのペットは「ウォーホルの本に名前が登場した」ということで少しは箔がつくだろう。とにかくまあ、そういう本なのだ。

日曜日の2時に久しぶりにトリがやってきた。やっぱり僕が本を読み終わったのをわかっていうようだった。

「退屈だっただろう？」

「出版社が山ほど在庫を抱えて困ってるってわけではないみたいだけど」

「どうかな」

「そうなんだよ。希少な本だったんだ」

「不思議なんだが」とトリは言った「自分の誕生日にウォーホルが何をしたかなんて知って、Nは嬉しいのか？」

——また妙なことを言い出した。

「そんな風には読まなかったけど」と僕は言う。

「そんな風にもどんな風にも、日記を読むんだからそういう風に読むしかないじゃないか。マキちゃんもそうやって読んでた」

「もしかしてトリはマキちゃんに読んでもらったのか？ この本を」

「当然だ。オレは本が読めない」

あきれたものだ。あれを誰かに読み聞かせるのがどれだけ大変か、トリにはわからないのだ。

「結果、Nの誕生日は3回登場する」とトリは言った。「1981年は火曜日で、その日ウォーホルは防弾チョッキを270ドルで買った。タクシーに2回乗って、全部で15ドルを支払った。そんな一日に、Nの家族はNの誕生日を祝った。そんなことを知ってカンガイ深いカ？」

「そんなこと一度も言っていない」と僕は反論した。それは彼の一日であって、僕の一日は当然だが何も関連性はない。互いに影響を及ぼしているなんてことも絶対にない。トリはさらに続ける。

「翌年の1982年は水曜日で、ウォーホルはマッシュルームと豆の料理を使ったフランス料理らしきものを食べた。この日もタクシーに乗ったが、料金は記録されていない。最後は1986年だ。この年は月曜日。この日ウォーホルはタクシーに2回乗って、全部で11ドルを払っている。それからリズ・テイラーの鼻が大きいと嫌味を言ってる。ところでN、ケジラミって何ダ？」

「ケジラミ？」

「日記の中にあっただろう？ マキちゃんが何となく口にしたくなさそうだったから、聞かなかったんだ。教えてくれ」

僕はトリにケジラミについて知っていることを教えた。大した情報ではないと思う。

「なるほど。じゃあオレは大丈夫なんだナ？」

「たぶんね」と僕は言った。「ひとつ聞いてもいいかな」

「何だ」

「マキちゃんの誕生日にはウォーホルは何をしてた？」

「おう、そうくると思ったぜ。幸運と言うべきなんだろうな、マキちゃんが生まれたまさにその日の日記がある。こういう具合だ。よく聞けよN」

(1979年12月4日火曜日)

チエさんと庄吉つつあんと三人で『キタノクニカラ』のプロモーションのために三週間の旅に出ていて、すごく疲れた。皮切りはお定まりの富良野からはじまって、空知映画劇場のボックス席にすわったりしていたけど、表参道ではさんざんな目にあつた。前は松屋書店といていた例のイツジさんの書店だよ。そこでサイン会をしていたら、腹にナイフ傷のある女が近づいてきてわめいたんだ。「この人はアンディ・ウォーホルじゃないわ! 私ハアンディ・ウォーホルと寝たことがあるけど、彼は2メートルを超える大男で、ドアをくぐり抜けられないわ。それに、彼はすごいパラノイアだから、こんなふうに本屋にいるなんてことはありえないわ!」って(笑)。この女のいうことがじつは正しいのかもしれない。大阪の千日前の飲み屋では、ボイラー・ルームで盛大なパーティーを開いてくれた。集まった若者たちはみんなこの本のことを「ニート」で「クール」だといっていた。姫路では、丁寧で親切な人ばかりだった。挨拶一つでも、「わざわざご足労いただいてたいへん光栄です」なんていうんだ。ぼくもあんなふうにしやべれたらいいと思うよ——あんな丁寧な言葉はどうてい思いつかない。ああ、それから姫路では親切な大男が、サイン会のあとで個人的にディスコへ招待したいとまでいうんだ。その男は「あなたがたは遠来のお客様だからおもてなししなければ——とてもすてきなゲイの溜り場ですよ。もちろん、東京からこられた方々にはお珍しくもなんともないでしょうがね」といってね。ぼくらは冗談だと思って笑ったけど、相手は本気なんだ。

「ナ?」

僕はトリの記憶力に感心した。登場人物と地名を適当に変えたのはわかったが、そんな日記が本当にあつたかどうかは覚えていなかった(何せ僕は1週間で13年分の日記を読んだのだ)。

「でもあれだぜ」とトリは言った。「ここという『ニート』は『ニーテンタイディ』の『ニート』だからな。Nのことじゃないぜ」

「知ってるぞ。neat and tidy」

「そう、ニーテンタイディ」

ウォーホルは最後の日記の日付の5日後の朝、ニューヨークの病院で死んだ。
(そういえばトリはどこで僕の誕生日を知ったのだろうか?)

*

何のために本を読むのか、と人に聞かれたことがある。僕はその答えについて一晩考
え抜き、あらゆる条件づけや例外や思いつきや気分から完全に開放されたひとつの結論
にたどり着く。

僕は、本を読むという時間を過ごすために、本を読んでいる。

僕にとって本を読むという行為は、それ自体が目的であり、慰めであり、慰めの実践
であり、時間の流れ方である。映画を観るという行為も、本質的には同じようなものだ
と言える。僕が映画を観るのは、誰かの会話に加わるためでもなく、監督や俳優や音楽
家の名前を覚えることでもなく、教養のためでもなく、涙を流したり笑ったりするため
でもない。ただ映画を観るという時間を過ごすために、映画を観る。そしてその時間は、
僕の人生のために用意された時間の中にはなく、特別に与えられた時間となる。その間、
僕は大河のそばを流れる細い枝川を泳ぐことを許される。意識はそこで清らかに覚醒し、
ふやけた皮膚はひだとなって流れる。僕はそうやって幸福な時間を過ごし、やがてもと
の流れに戻っていく。

体験なんだ、と僕は思う。本を読むことは体験であり、映画を観ることも体験である。
つまり僕は体験のために本を読み、映画を観る。すべての本とすべての映画には体験が
含まれている。それを体験たらしめるかどうかは、僕の問題であって、本や映画の問題
ではない。したがって、『ウォーホル日記』は退屈ではない。なぜか。体験は退屈ではな
いからだ。体験は前を向いて歩くことであり、前を向いて歩くことは絶対に退屈ではな
い。もしも『ウォーホル日記』を僕が退屈だと感じたとなれば、それは僕が『ウォーホ
ル日記』を体験できなかったからに他ならない。体験たりえない時間の流れは退屈なの
だ。その場合、原因は僕の側にある。

*

「退屈の原因は体験の欠如なんだよ」と僕はトリに向かって言った。
昼過ぎからずっと小雨が降っていたので、僕は窓をいつもの半分くらい開けてトリと
話をする。

「ほほう」トリが喉を鳴らした。サッシの上の水滴をトリの足が踏みつけている。

『ゲームなんてやってると、ますます退屈になる』って前に言っただろう」

「言った」

「あれは『ゲームは退屈だ』ってというのが大前提にある、違うかい？」

「そう、ゲームは退屈だ」

「この間、例の電車のゲームをやってみた。死ぬほど退屈だったよ。でも退屈だったの

はゲームじゃない。退屈だったのは僕なんだ。もしゲームが退屈だったとしたら、僕はこんな風に考えただろう。『このゲームは退屈だ』ってね。でも僕はそうは思わなかった。

『何が退屈なのかがよくわからない』って思ったんだ。終始そんな感じだった。ゲームはほとんど勝手に始まって勝手に終わったようなものだったけどね。でも僕は退屈した」

「揺るぎない結論として」

「そう。何が退屈なのかわからないうちに、僕は退屈していたんだ。つまりね、退屈を対象に押し付けることはできないんじゃないかって思うんだ。何が退屈かってことをはつきりとわかっている場合もあるだろうけど、本質的にはそれは勘違いなんだ。退屈なのは僕であって、対象ではない。だから退屈の原因が対象にあったとしても、対象に退屈の原因を全部押し付けてしまうのは身勝手だ」

トリは僕の話の黙って聞いている。目玉がときどき左右にきよろきよろと動く。

「ゲームだって体験たりうるんだ。体験である以上、そこに退屈はない。でも体験としての時間を提供できない場合や、こちらが体験として受け止められない場合は、残念ながらそのゲームは僕を退屈させる。つまり体験の欠如だよ」

「電車は駄目だったの力？」

「あいにくね」

めずらしくその日はトリがあまりものを言わないままいなくなった。雨のせいかもしれない。僕はイツジさんが歩いたあとのぬかるみの窪みを目で追いながら、雨が細々と落ちていく音に聞き入った。さびれた空き地に、イツジさんの浅い足跡がいつまでも残って消えなかった。午後6時になると角のパン屋のシャッターが閉まり、家の窓から漏れた光が空き地をまんべんなく照らし、ときどき通りかかる車やスクーターのヘッドライトに当たってイツジさんの足跡の縁の泥が光った。

関心が体験を呼ぶんだ。

夜中に目が覚めたときにその一言がふと思ひ浮かび、僕はしばらく眠れなくなる。トリはどこか遠い林の中で眠っているのだろう。僕はその言葉を忘れないように、机の上に広げた新聞の隅に書き留めた。そういえば木の枝の上で、トリは雨に濡れないのだろうか。僕はそんなことを考え始め、ますます眠れなくなった。

*

マキちゃんがめずらしくスカートをはいてきた日のことだ。

昼前にいつもより早くイツジさんが空き地に現れて、2つ並んだドラム缶の前でこちらを背にして立ち止まった。両手をドラム缶の上に載せ、イツジさんはその姿勢でじっ

と立ったまま1時間近く動かなかった。ときどき手が動いているように見えたから、何か作業をしていたのかもしれない。作業？

ドラム缶の上には何も無い。雨が降ったあと、少し水が溜まっているくらいのものだ。ドラム缶は逆さを向いているから、何かを入れたり出したりすることはできない。それは赤錆びただの丸い鉄板だ。イツジさんはその鉄板に両手をついたまま、じっと動かない。だんだん心配になってきて、様子を見に空き地へ行こうかと思ったころ、角のパン屋のドアが開いてマキちゃんが出てきた。

マキちゃんは朝と同じ赤いチェックのスカートをはいていた。マキちゃんは店を出たところでほんの少し頭を動かして辺りの様子を伺ってから、空き地にいたイツジさんの方に向かつて楽しそうに手を振った。いや、イツジさんの方ではなく、明らかにイツジさんに向かつて彼女は手を振っていた。

僕はイツジさんに視線を移した。イツジさんはよっころしよと言いそうな動きでドラム缶から手を離し、心なしかいつもよりしつかりした足取りでパン屋へ向かつて歩き始めた。イツジさんはパン屋の前でマキちゃんの正面に立って何やら話をしたあと、マキちゃんの前に立って歩き始めた。2人の姿はすぐに見えなくなった。

――何だ？

不思議だった。わけがわからなかった。2人に何があったのだろうか。僕は瞬時にいくつかの仮説を立てた。

- ・今日はパンの耳がなかったから、お詫びに別のパン屋にパンの耳をもらいに行った
- ・イツジさんが何かのお礼にお昼をご馳走することになった
- ・イツジさんがあまりにも強引に誘うのでデートすることになった
- （いや、これは違うな。マキちゃんの表情が違う）
- ・2人は親戚だった

そこまで考えて、僕はイツジさんがさつき空き地のドラム缶の前で立っていた後ろ姿が、若い男性がバーのカウンターに肘をついて、カクテルを飲みながら女性を待っているときの後ろ姿を彷彿とさせることに気がついた。それは単なる僕のイメージでしかなかったが、考えれば考えるほどその2つのイメージは見事に重なり合った。

「まいったな」と僕は呟いた。

その日はトリが来なかった。僕はトリと話したかった。マキちゃんとイツジさんが恋人よろしくどこかへ消えたことと、2人が暗くなっても帰ってこなかったことを。

その日から何日か続けて同じことが繰り返された。イツジさんが昼前に現れ、ドラム缶の前に立ち、マキちゃんがパン屋から出てきて、2人が一緒にどこかへ歩いていく。ただし、マキちゃんがスカートをはいたのは最初の日だけだった。

「はじめてのデートだったから特別だったんだろう？」とトリが言った。

僕はその出来事をトリに話していた。トリはたぶん知っていたのだと思うが、わざとらしく「へえ、そうかい」と驚かせてみた。僕はトリに仮説や疑問をあれこれぶつけてみたけれど、大した反応は返ってこなかった。まあいいじゃないか他人のことなんだし、と言わんばかりの態度だった。いつも電線で人のことを見ているくせに。

「トリだって退屈することはあるんだろう？」僕は少し意地悪な質問を試みた。否定するのはわかっていたが、一度聞いてみたかった質問でもあった。案の定、答えはすらすらと返ってきた。

「退屈はしのぐもの。逃げ切れないし、暇のように潰せるものでもない。ある偉い坊さんの言葉だ」

それじゃあ答えになってないじゃないか、と僕は思った。

「前に言っただろウ？ オレがやることは食う、寝る、飛ぶ。そして勉強。退屈することなんてあるわけがない」

「前に聞いたよ」と僕は言った。

「でもな、Nよ」とトリは言った。「オレだって退屈し、そうになることはあるんだぜ」

僕は身を乗り出した。

「そのときはこうやるっていうまじないのようなものがある。知りたいか？」

僕は大きく頷く。

「まずは広い海の上を飛んでいるところを想像する。オオウナバラだ。海はどこまでも広くて、どこまでも青くて、どこまでも深い。その孤高なほどのシンエンを目の前にすると、決まってオレは怖気づく。もしかしたら渡りきれないんじゃないかってね。でも海は限られた存在だ。海を越えたらかならず陸地がある。世界は広いが、海も陸地も限られている。なにせ海に囲まれた場所のことを陸地と呼ぶんだぜ、そうだろう？ ということは、世界には海と陸地しかないってことになる。海を越えるときに辛くなったら、その先にある陸地のことを考える。陸地を越えるときに辛くなったら、その先にある海のことを考える。そうすれば、だんだん気持ちが楽になっていく。わかる力？ こういう感覚」

「わかる」と僕は答えた。

「オレはこれを通してやる。ニンゲンよりは海と陸地について頻繁に考えているから、それができるんだ。Nなら——そうだな、世界地図を買ってくればいいんじゃないか？

もちろん白地図だぜ。真っ白な世界地図を買ってきて、海の部分だけを色えんぴつで青く塗ってみるんだ。いいカイ？　まずは海のことを気にするんだ。青い色えんぴつを持って地図に向かえ。そうしたら今度は陸地のことが気になってくる。陸地を何色で塗ったらいいか、深く深く悩むんだ。どうだい、退屈する暇なんて、これっぽっちもないだろうウ？」

その日トリが帰ったすぐあと、パン屋のシャッターが閉まる直前になってマキちゃんとイツジさんが戻ってきた。シャッターの向こうからおばさんが顔を出し、イツジさんにパンの耳の入ったビニール袋を手渡した。イツジさんは何度もおじぎをしてお礼を言っ、最後にマキちゃんに手を振ってから空き地に向かって歩き始めた。マキちゃんはイツジさんの歩く姿をしばらく見つめてから、パン屋の右の道へ向かって歩き出した。2人の姿はすぐに見えなくなり、ほどなくパン屋の明かりが消えた。

その次の日から、イツジさんの姿を見かけなくなった。昼前に現れてドラム缶の前に立つことも、パンの耳をもらいに來ることもなくなった。イツジさんが空き地を通らなくなつたせいで、空き地が少し寂れて見えるようになった。心なしか、雑草が伸びたような氣もした。しばらくの間、空き地を横切る人を見かけなかった。もちろんドラム缶の前に立ち止まって手をつく人を見ることはなかった。

それから数日後、トリが教えてくれた。

「イツジさん、施設に入ったってよ」

*

空き地のスクラップ車の上に落ち葉が溜まっている。空き地には木が一本もないから、風でどこから運ばれてきたのだろう。役目を終えてナンバープレートを取り外されたその車の姿には、否応なく物悲しさが漂う。果たしてもう車と呼べるものなのか？　誰かにそう言つて責められているみたいに感じる。車の中は陰になってよく見えないけれど、シートとハンドルがあるのはわかる。ボンネットとトランクはしっかりと閉まっ、っていて、ちゃんと風雨をしのいでいる。ガソリンさえ入れてやればまだ動きそうな氣がする。

スクラップ車を見ているとき、ふとトリの姿が頭をよぎつた。トリをはじめ見たときのあの印象だ。何かが足りず、それでも成り立っている。トリは空を飛ぶし、米粒を食べる。何が足りないのだろうかときどき思うことがあったが、その不足感はあるのスクラップ車に近いものがある。トリは「鳥のようなもの」であつて、「鳥」ではない。トリが「鳥」として成立するための最後の一步が足りないのだ。ナンバープレートのような

何かが。

夕暮れ時になってトリが飛んできた。最近は姿を見せるのが遅くなった。季節のせいだろうか。

「Nよ」

「何だい」

「世界は昔より退屈になっている。そう思わないか？」

僕は少し間を置いて言う。

「違うね。世界を退屈だと決めてしまわないようにしなければいけないんだ。原因は人間の側にある。体験できるかできないかが問題なんだ」

「ふむ、あるいは井戸の底を掘り返しているうちに、本当の『底』に到達しようとしているのかもしれないな」

全然返事になっていない、と僕は思った。トリはこの間僕が言ったことをあまり真剣に受け止めなかったのかもしれない。そして電車や羊へ向かっていた思いが今度は『地底』へ向かい始め、それを僕に押しつけようとしている。トリは四六時中、比喻の材料を探しているのだ。

『底』が見えたとき、ニンゲンは末期的な退屈に陥る。ガツンと底にぶち当たったとき、その場にへたへたと座り込むか、何か別のことを思いつくか、そのどちらを選ぶかで未来は変わる。例えば誰かが横穴を掘り始めれば、その先にはまだ未来がある。『掘る』行為を肯定的と捉えるか、その逆と捉えるか。電車から逃げていると捉えるか、前を向いて歩き続けていると――」

「なあ」

僕はトリが喋るのを遮った。たぶんはじめてのことだ。

「ナニ？」トリはとくに機嫌を損ねた様子でもなかった。

「ひとつわかったことがあるんだ。前にトリが言ってた偉大なるテーゼ」

「ン？ 何だったかな？」

「人間は散歩させられている」

「――ああ、そうだった。それがどうした？」

「答えがわかったんだ。人間が何に散歩させられているか」

ほほう、というような不遜な態度を見せてからトリは言った。

「言ってみな」

「人間は、退屈に散歩させられている」

「セイカイ！」トリは両方の羽根をバサッと勢い良く空に向けて持ち上げた。僕は嬉しくて椅子にふんぞり返った。

「成長したなNよ」

僕はふふん、と鼻を鳴らした。いい気分だった。

横から射す夕陽のせい、トリの左の羽が赤ずんで見えた。トリはさっきまでの話の続きをせず、ときどき口ばしで毛づくろいをしながらサッシの上に無言のまま立っていた。喋らなければ見た目は本当にただの鳥なのだが、トリが喋らないとどうも落ち着かない。

「ひとつ聞いてもいいかな」と僕は言った。少しためらったけど、聞いてみることにした。

「何ダ？」

「トリは種類で言うとなんになるんだい？」

「種類？」

「スズメとかウグイスとか」

「ハハッ、Nは面白いことを言う」

「何だよ」

「そんな風にオレのことを見てたのか？ オレが何かつて？」

「そうだよ。鳥の一種だとは思ってたけど。でも具体的に何かって言われると答えに困るんだ、正直言つて」

「ひとついいことを教えてやろう」

トリはそこで少し間を置いた。その間が長かったので、僕は「頼むよ」と小声で言った。

「ニンゲンはみんなこう思っている。自分は『鳥』か『鳥でないもの』のどちらかにしか出会わないってね。そりやそうだ。普通に生きてりやそう思うさ。Nだって『鳥のようなもの』なんて見たことないだらう？」

僕は首をひねった。空き地のスクラップ車が視界の隅にいる。車。車のようなもの。目の前のトリ。鳥のようなもの。

「ナ？ Nは『鳥のようなもの』に出会ったことがないと思ってる。ときにNよ、前にオレが、意味を持ってしまった世界をニンゲンが退屈だと感じるのは運命だって言っただらう。覚えてる力？」

「覚えてる。致命的な運命」

「そうだ。意味を持ってしまった世界ってのは退屈だ。例外なくみんな退屈だ。でもNは世界に退屈しきってるわけではない。そうだらう？」

僕は頷いた。

「ということは、Nの世界はまだ『意味を持ってしまったもの』で満たされていないんだ。つまり、Nはいつか『鳥のようなもの』に出会うかもしれないんだ」

——いつか鳥のようなものに出会う。

不思議な響きのある言葉だ。

「だからまだまだ救いようがある。そして未来は明るい。そう思わないか？」

トリの口調がいつになく穏やかだった。何かを諭すように、慎重に言葉を選んでいる気がした。

「さて、そういうわけで」とトリは言った。「オレは何であるか？」

僕は窓の外を見た。スクラップ車とドラム缶と角のパン屋とマキちゃんのマンションが一度に目に留まった。マンションの窓ガラスに夕陽の色が映り込んでいる。

「偉大なる無関心無職Nよ、今日はお開きにしよう。答えは追々聞きに来る」

トリはそう言うのと2、3歩あとずさりをしてサッシの縁に立って横を向いた。

「もうひとつだけ聞いていいかな」と僕は言った。トリは飛び立つ準備をしている。「イツジさん、大丈夫かな」

するとトリは広げかけた羽を一旦しまつて、またこちらを向いた。

「Nよ、冒険に出るんだ」

トリはそう言い残すと、パサッと軽い音を立てて舞い上がった。屋根の瓦の上にあったトリの長い影がみるみるうちに小さくなり、やがて消えてなくなった。

*

朝起きると、とても頭が冴えていた。僕は何かが心の中からこみ上げてくる気がして、そわそわして布団から這い出した。

澄んだ朝だった。朝露が窓のサッシのところをしつとりと濡らしている。太陽は低い位置から世界を伺うようにして、ゆつくりと上りはじめたところだった。空には雲ひとつ見えない。

時計を見ると6時50分だった。僕は着替えをしてから顔を洗うと、財布をポケットに入れて玄関を飛び出した。家の前の道路をすぐ左に折れると、角のパン屋までは一直線だ。歩いている途中、左のスニーカーの紐が緩んでいるのに気がつき、道路の真ん中に立ち止まって結び直す。すると今度は右のスニーカーが気になって、右も同じように結び直す。そして僕は太股で歩き始める。

パン屋の角まで来たところで、僕は右手からマキちゃんが小走りに駆けてくるのを見た。マキちゃんは僕の姿を見ると、少しスピードを緩めた。

ガラガラっという音がして、シャッターが勢いよく開いた。マキちゃんが息を切らしながら、「おはようございます」とおばさんに声を掛けた。僕が2人の間に挟まれたまま、どんな挨拶をしたらいいか迷っていると、マキちゃんが僕を見て言った。

「いらっしやいませ」

その日、僕は世界地図の白地図を買ってきて部屋の一番目立つ場所に貼り、押入れの

中にしまっていた12色の色鉛筆の青を出してきて海の部分を塗りつぶした。海はとてみややこしい形をしていたが、僕はできるだけはみ出さないように丁寧に塗った。海の上にはまばらな鉛筆の芯の跡が残ったが、遠目に見るとちゃんと青かった。

白い陸地は、井戸の底に溜まった湧き水のように見えた。

僕は明日のことを考えて、眠れなくなった。

了

(次のページもお読み下さい)

このたびは『Nの退屈／真鍋 敢』をご購読いただき
誠にありがとうございました。

ホームページにて感想・コメントを承っておりますので、
お時間ございましたらご協力をいただきますようお願い致します。

<http://www.kanmanabe.com/>

2006年9月29日 真鍋 敢